

「ごんぎつね」指導法の研究

(2)〈物語の力〉と〈共生〉のメッセージについて

金 戸 清 高

1. はじめに

前稿でも触れたが「ごんぎつね」は1956年以来、半世紀に亘って小学校国語科教材に採り上げられてきた。その間「学習指導要領」は「小学校学習指導要領国語科編（試案）」（1951年改訂版）から、文部省告示第80号（1958年）、同第268号（1968年）、同第155号（1977年）、同第24号（1989年）、同第175号（1998年）と改編されている。〈ゆとりと充実〉をキーワードに授業時数等の緩和が進行した戦後教育は98年版「学習指導要領」に謳われた「生きる力」の育成へと展開してきた。「ごんぎつね」は1947年の「試案」を除く戦後すべての学習指導要領に定められた教育内容に堪えてきた希有な教材といえる。

例えば小学校国語教科書として最も多く採択されている光村図書版では「ごんぎつね」は、『国語四下』（2006年6月）の最終部「学習したことを生かして」に位置する。『学習指導書4下 はばたき』（2005年2月、以下「新指導書」と言う。）には「ねらい」として以下のような説明がある。

「学習したことを生かして」とは、『学習指導要領』で強調されている「生きる力」、すなわち「自ら学び自ら考える力」を「児童が、自らの力で教材と取り組み、今まで学んできた方法を生かして、楽しみながら自分なりに学習する」ことととらえ、これを具体的に教材化しようとしたものである。

「ねらい」では更に「一人一人の児童が学習の中心であるから、『単元』とはせず、全く新しい『学習の場』とした」とある。因みに前指導要領では「ごんぎつね」は「四 人物の気持ちの動きを」という単元で扱われており、『国語 学習指導書4年下 はばたき』（光村図書1992年2月、以下「旧指導書」と言う。）では以下のような解説がなされている。

今の子供たちは、利己的で他人のことを思いやる気持ちに欠けているといわれます。確かに、自分だけの世界にこもりがちで、友達どうしわいわいと心を許して遊んだり話し合ったりすることが少ないようです。／この「ごんぎつね」という作品は、そんな今の子供たちの心を揺り動かしてくれるものがあると考えます。／主人公、ごんの善意の行動が、結果的にはいつも相手の兵十を傷つけてしまい、最後には、その相手から銃で撃たれてしまう。その最後の場面で、ほんとうに二人は分かり合えたのでしょうか。心を通じ合うことは簡単なことではありませんが、それだけに、何よりも大切にしなければなりません。／この、悲しい結末の物語の、美しい描写の数々を読んで考えてみましょう。（下線引用者、以下同。）

バブル景気のただ中に昭和が終わり、平成となった元年3月の「告示」である。この年の改訂では「第4章 特別活動」において「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする」ことが定められ、学校における国旗掲揚と国歌斉唱とが法的拘束力を持つようになったことで知られている。尚同時期に「幼稚園教育要領」も1964年から25年振りに改訂され、「幼児の主体的な活動を促」す、所謂＜自由保育＞への転換がなされた年でもあった。

ここで留意したいのは、当時子どもたちを「利己的で他人のことを思いやる気持ちに欠け」、「自分だけの世界にこもりがち」と指摘しているところである。これは同時代の社会問題の深刻さを物語っている。1983年7月、任天堂より発売された「ファミリーコンピュータ」は「スーパーマリオブラザーズ」等のソフトによって大ブレイクし、中森明夫氏が同年、「おたく」の呼称を用いたのだが、この人間類型の呼称が80年後半のバブル時代に確立され、社会現象化した。88年から89年にかけて、「東京・埼玉幼女連続殺人事件」が勃発した。「利己的」で「思いやる気持ちに欠け」た子どもたちの心を、「ごんぎつね」が「揺り動かしてくれる」との期待をもってこの教科書が編纂されているのだという。対機械、対モノとの関係に終始する現代の子どもたちにとって、人と人とのつながりの回復という問題は重要にして緊急の課題でもあったのだ。

先の改訂から約10年後、新指導書（前掲）では以下のように教材観が述べられている。

児童が「自ら学ぶ」ことを保障するには、優れた教材を用意することが第一である。児童の興味・関心に沿いながらも、そこから一步突き抜けて、児童自身の心を直接的につかみ得る教材でなければならない。そう考えて、心の交流の美しさと悲しさを描いた文学教材から、「ごんぎつね」を取り上げた。

ひとりぼっちのごんぎつね、ごんと、兵十との心のすれ違いが、美しい情景描写を背景に、まるで映画のような遠近感のある筆致で描き出された作品である。味わい深い挿絵とあいまって、児童の感受性に強く訴え、深く心に食い入る力をもった教材であると言えるだろう。児童自らが内なる衝動に突き動かされるようにして文章にのめり込み、無我夢中になって読みふける、そんな魅力に富んだ作品である。

つまりこの10年、＜人と人とのつながりの回復＞という課題は依然残されたままであるどころか、「心の交流」は益々困難を極めてきているとさえ言うことが出来るだろう。所謂「生きる力」をめぐる中央教育審議会の答申は現代において特徴的な課題を如実に反映したものである。すなわち、

いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第一次答申 1996年）

である。つまり現代の若者に最も欠けているのは、未知の課題を克服する能力と、他者を思いやる倫理観なのである。このように現代的政治的課題に堪えうるとされる教材「ごんぎつね」の魅力は一体何なのか。指導書は「ごんぎつね」がごんと兵十との「心のすれ違い」を語った教材だ

という。この教材が「心のすれ違い」を語ることによって、どのように「心の交流の美しさ」を学び取るのか、以下教材の記述内容を読み取ることから考察を試みたい。

2. 話型にみる結末の予定と悲劇性

小学校国語科教材、特に文学教材では＜心の交流＞を主題としたものが殆どとあっていい。光村図書版の「ごんぎつね」は小学校「4年下」の巻末に位置しているが、同じ光村図書版の他学年の国語科教科書には以下のような教材がみられる。

- ① ハンス＝ウィルヘルム作・久山太市訳「ずうっと、ずっと、大すきだよ」(1年下。「ぼく」と犬の「エルフ」)
- ② 岸なみ「たぬきの糸車」(同。「おかみさん」とたぬき)
- ③ アーノルド＝ローベル作・美希卓訳「お手紙」(2年下。がまくんとかえるくん)
- ④ 大塚勇三「スーホの白い馬」(同。スーホと白馬)
- ⑤ 斎藤隆介「モチモチの木」(3年下。豆太と「じさま」)
- ⑥ あまんきみこ「白いぼうし」(4年上。松井さんと女の子)
- ⑦ 椋鳩十「大造じいさんとガン」(5年下。大造じいさんと「残雪」)
- ⑧ 立松和平「海の命」(6年下。太一と「クエ」)

これらの内、人と動物との交流を扱ったものは①、②、④、⑥、⑦、⑧であるが、上記8教材すべてが物語において「心の交流」を可能とした教材であるのに対し、「ごんぎつね」は「心のすれ違い」を主題とした教材として位置づけられている。ここで教材「ごんぎつね」の系統観を確認しておくが、これを教科書に採用された説話文学と捉えるなら、「たぬきの糸車」、「スーホの白い馬」、「モチモチの木」から「大造じいさんとガン」「やまなし」への流れとして位置づけられる。あるいは「スーホの白い馬」は、スーホと白馬との交流が「とのさま」の違約によって引き裂かれる物語であるが、ごんと兵十との物語を「中山様」という封建社会での城下で展開される物語と位置づければ、これらの教材は奇妙に符牒する³。あるいはこのような系統の中で、人と動物との＜交流＞から＜決別＞へと向かう悲劇が①と④(低学年)、＜敵対＞から＜共感＞へと向かうのが⑦と⑧(高学年)である。このような配置が編集者の意図をどこまで反映したものであるかはつまびらかにしないが、「ごんぎつね」がそのいずれにも属さず、またある意味いずれの要素も備えた、いわば和解を目指す＜敵対＞から永遠の＜決別＞へと結実する教材としては例外的な物語であると言えることが出来よう。

ところでごんはなぜ死ななければならなかったのか。例えば同じ新美南吉による「てぶくろを買いに」では、子ぎつねは間違っただけの手を差し出したにもかかわらず、手袋を手に入れることができた。それは無論「ぼうし屋」が子ぎつねの出した「白銅貨」を偽物でないと判断したからではあるが、「ごんぎつね」が、先述のように、「中山様」という封建社会での物語であることが大きな力学を働かせてもいるのである。封建社会においては＜支配＞と＜被支配＞とのヒエラルヒーは絶大である。兵十を始めとした物語に登場する村人の貧しさは被抑圧者としてのそれであって、いかなることがあっても変わることはない。これと同じ力学が、物語においては兵十ほか村人と狐(獣)であるごんとの間にも機能する。兵十は「火なわじゅう」という圧倒的な殺傷

力を持った武器を用いてごんを撃つ。ちょうどスーホが「とのさま」によっていとも簡単に「むすめとけっこんさせる」という契約を一方的に破棄され、それどころか最も大切な「白馬」をも奪い取られるという暴挙に対し、いかなる抵抗も無益だったように、いかにごんが兵十へと思いを寄せようが、兵十にとってはごんは所詮狐であって、二者が<心を通わせる>ことはないのである。「ごんぎつね」の悲劇性は、こうした兵十にとっての圧倒的弱者であるごんの視点をもって、物語の殆どが語られたところにあるのだ。

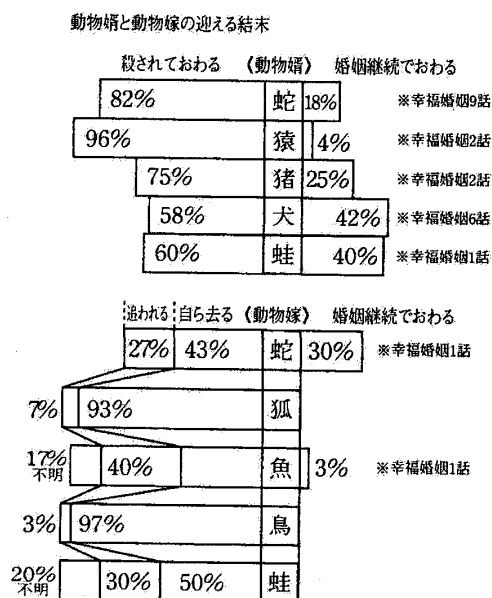
墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。＜略＞人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。(2)

新旧指導書の指摘する<自然の美しさ>が見事に表れた箇所である。しかし一方でこうした自然の<美>を、人間たちがその営みの中でいとも簡単に踏みにじっていることをも示す。こうした<人>と<自然>の対立表現も、「ごんぎつね」結末を予感させる。あるいは「うなぎのつぐない」として継続されるごんの行為も、兵十に持参するものが「くり」や「松たけ」という、季節の収穫物に限定される以上、来るべき冬には断たれるものであって、永続しないことを暗に示しているのである。

ところで鈴木啓子氏は「ごんぎつね」が「鶴女房」や「浦島太郎」をはじめとする一連の「異類婚姻譚」の女性と共通する側面を持つ⁴ことを指摘する。

もちろんごんは女性には変身しない。兵十に性と富をもたらすどころか、むしろ損害を与える存在として登場する、けれど、兵十の母親の死を契機に、兵十に特別の接触をはかるごん狐という異類を、母親を喪失した兵十の抑圧された「無意識と情動」と意味づけることに、さほど無理はないように思う⁴。

「異類婚姻譚」については、例えば中村とも子・弓良久美子・間宮史子三氏による詳細な研究がある。それによると「動物婿」と「動物嫁」とでは、図のような結末の違いが見られるという⁵。



つまり「動物婿」の場合はその殆どが「殺されておわる」り、「動物嫁」の場合も殆どが「追われる」か「自ら去る」結末となっており、「幸福婚姻」のケースは殆どない。このような話型学的統計が語るように、ごんの兵十への思いは決して遂げられることなく、加えてごんが男であることによって、「殺されておわる」物語の結末は、作者の意図とは別の次元で、ある意味予定されていたと言えるのである。

あるいは物語冒頭の次の記述である。「ちょいといたずらがしたくなかった」ごんは、びくの魚を逃がし始める。最後に「太いうなぎをつかみにかか」った。

なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手では

つかめません。ごんは、じれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッと行って、ごんの首へまき付きました。そのとたんに兵十が、向こうから、／「うわあ、ぬすつとぎつねめ。」／とどなりたてました。(1)

鈴木啓子氏はこの記述に着目し、次のように指摘する。

兵十の網から取り出され、ごんの手を逃れて、その首に巻きついた掴みどころのない鰻は、兵十の意識化されない情動や欲望の象徴と読めるのではなかろうか⁷。

「うなぎ」といい「火なわじゅう」といい、それが何のメタファーかは明らかだし、「ごんぎつね」が早熟な児童にとってどのようなメッセージを受け取るかは興味深いところである。たとえそうではなくても「ごんぎつね」が、兵十とごんとの疑似恋愛体験の物語として理解される可能性は十分あるし、またそのような読みを許容するテキストであることは疑いない。

このように鈴木氏の指摘は示唆に富むが、この「うなぎ」の場面は、実は物語の結末への伏線として機能していることは留意して良い。すなわち、ちょっとしたいたずらが命取りになってしまふという「ごんぎつね」の構図である。ただの狐が、種を超えて人間と関わることの危険性を、ごんは十分に認識していたはずである。そういった危険性を思い知る契機は次の箇所にも窺える。

加助が、ひょいと後ろを見ました。ごんはびくっとして、小さくなって立ち止まりました。(5)

この場面ではごんの存在は加助に知られることはなかった。ただ、本来「中山から少しはなれた山の中に」(1)村落とは隔絶された場所で生活しなければならない狐が、その領域を超えて人間と関わろうとすることがいかに危険かは、ごんは十分に知っていた筈だったのだ。

とはいえ「ごんぎつね」の悲劇性と抒情性、所謂物語のカタルシス効果は、こうした当然の帰結としての<予定された結末>にもかかわらず、読者にとって絶大なものといえる。その要因のひとつとして、物語におけるごんの徹底した擬人化が挙げられよう。それは、ごんの「手」の用い方にも顕著である。

ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げこみました。(1)

なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。(同)

ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちのうら口から、うちの中へいわしを投げ込んで、あなは向かってかけもどりました。(3)

次の日には、ごんは山でくりをどっさり拾って、それをかかえて兵十のうへへ行きました。(同)

その明くる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうへへ出かけました。(6)

こうした擬人法によって読者はごんに対しシンパシーを抱かされるのだが、それは冒頭において

既に顕著になっている。すなわち、ごんは「ひとりぼっちの小ぎつね」(1)と書かれる。元来狐は群れをなして生活する動物ではない。これを殊更「ひとりぼっち」という感傷的な記述をもって紹介された物語冒頭から、読者はごんへのシンパシーを惹起するのである。あるいはごんの「いたずら」の内容である。「菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり」「とんがらしをむしり取っていったり」と、通常動物が生理的欲求をみたすための民家へ及ぼす影響とは別次元の災厄が書かれている。あたかもごんの存在が村落に敵対する人間の仕業であるかのような記述なのである。ところが村人にとってこのような災いを及ぼす狐を「ひとりぼっち」と言うとき、ごんの行為は読者に別の意味を抱かせる。すなわち人の気を惹く、「いたずら」という行為である。

あるいは読者のごんへと向けられる共感、多くの「動物嫁」の物語に特有の悲劇性によるのかもしれない。特に人と狐との「異類婚姻譚」は、例えば元祖竹田出雲による歌舞伎「蘆屋道満大内鑑」の元話となった「信太妻」の話に顕著である。

恋人を死なして乱心した安倍ノ安名が、正気に還つて来たのは、信太の森である。狩り出された古狐が逃げて来る。安名が救うてやった。亡き恋人の妹葛の葉姫といふのが来て、二人ながら幸福感に浸つてみると、石川悪右衛門といふのが現れて、姫を奪ふ。安名失望の極、腹を切らうとすると、先の狐が葛の葉姫に化けて来て留める。安名は都へも帰られない身の上とて、摂津国安倍野といふ村へ行つて、夫婦暮しをした。その内子供が生れて、五つ位になるまで何事もない。子供の名は「童子丸」と云うた。葛の葉姫の親「信太ノ莊司」は、安名の居処が知れたので実の葛の葉を連れて、おしかけ嫁に来る。来て見ると、安名は留守で、自分の娘に似た女が布を織つてゐる。安名が会うて見て、話を聞くと、訣らぬ事だらけである。今の女房になつてゐるのが、いかにも怪しい。さう言ふ話を聞いた狐葛の葉は、障子に歌を書き置いて、逃げて了ふ。名高い歌で、訣つた様な訣らぬ様な

恋しくば、たづね来て見よ。和泉なる信太の森のうらみ葛の葉
 なんだか弓爾波のあはぬ、よく世間にある狐の筆蹟とひとつで、如何にも狐らしい歌である。
 其後、あまりに童子丸が慕ふので、信太の森へ安名が連れてゆくと、葛の葉が出て来て、其子に姿を見せるといふ筋である。(折口信夫「信太妻の話」⁶⁾)

このように「ごんぎつね」には多くの「異類婚姻譚」の中でも、特に「動物嫁」的話型の側面と、「殺されておわる」「動物婿」の悲劇的結末の双方の要因を兼ね備えた物語といえる。それが作者固有の抒情性に支えられて語られたがために、「ごんぎつね」は多くの読者の共感を得ることができたのである。

3. 「心のすれ違い」の内実

ところで教材「ごんぎつね」における以下の部分については、近年の学習指導書ではあまり注意を払っていない。

ごんは、お念仏がすむまで、いどのそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかげ

ぼうしをふみふみ行きました。(5)

車田寿氏はこの一節にいち早く注目し、「ごんが兵十との結びつきをいかに求めていたか、読み取れる」と指摘した。このような読みは後の岩沢文雄氏の「求愛の歌²」という「ごんぎつね」評へと受け継がれていった。構図としてはごんは兵十たちの後を追っているのだから、「かげぼうし」を踏んでいるのはごんの前足、つまり「手」ということになる。「かげぼうし」が、ユング的に言えば<無意識の人格>であるなら、この場面は先述した鈴木氏による、「無意識と情動」という指摘を想起する。いずれにせよ兵十に何とか関わろうとしているごんのいじらしさが窺える箇所である。

さてごんは何故にかくまで兵十に関わろうとしているのか。それは突き詰めれば「うなぎのつぐない」(3)ということになるのだが、ごんの人間社会への交渉願望はそれ以前からあった。順を追って検証していきたい。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。／「兵十だな。」と、ごんは思いました。(1)

ごんは兼ねてから兵十のことをよく知っている。鈴木氏は先の引用とは別の論文で次のように指摘している。

われわれ読者は、<「兵十だな。」>という直接話法で記されたごんの内言をひとつの標識として、ごんという狐が人間と同等の内面世界を持ち、またそれを語り手は内側から語り得るのだという、このテキストの文芸上の約束事を了解することになるのである⁸。

「ごんぎつね」における語り手の位相を指摘する氏の指摘は首肯できる。ただ、ここではまず、ごんと兵十とが既知の間柄であることに留意しておきたい。たとえば兵十がごんを知っていたことは、次の箇所から窺える。

こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。(6)

このように兵十は兼ねてからごんのことを知っていた。しかし兵十のごんに対する評価は冒頭の「ぬすつとぎつね」(1)から変わっていない。否兵十を含めた村人のごんへの評価は「いたずらばかり」(1)する<迷惑狐>であった。村人たちと同様にごんも村人のことをよく知っている。物語には「弥助」「弥助の家内」「新兵衛」「新兵衛の家内」「兵十のおっかあ」(2)、「加助」「吉兵衛」(4)といった村人の名前が語り手の「わたし」(1)によって紹介されているが、「兵十だな」「兵十のおっかあ」というごんが兵十母子だけを知っていたとは考えにくい。ごんは村人たちとその人間関係を熟知しているのである。

それどころか「祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それにだいいち、お宮にのぼりが立つはずだが」「ああ、そうしきだ」と語るように、ごんは村人の習慣にまで熟知していることが窺える。

理由はもはや明らかであろう。ごんは村人たちと関わりたいのである。つまり、「中山」の共同体に加わりたいのだ。それは、ごんが「ひとりぼっち」であるからに起因している。つまりごんの当初の願いは「中山」の共同体に仲間として受け入れられることであって、兵十との関わりを始めから求めていたわけではない。そうしたごんが兵十と関わるようになっていったのは、先述のくうなぎ事件>を契機としてなのである。

兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。(2)

屢々指摘されているが、これはすべてごんの勝手な空想である。「ちがいない」は、確度は高いが推測を表す言葉であるし、「だろう」も無論同様である。これらはあくまでもごんが「そのぼん」、「あなの中で考え」た物語であって、事実であるとは書かれていない。にもかかわらずこの物語がごんを捉えて離れないのは、たった一人の肉親である母の死によって兵十が「おれと同じ、ひとりぼっち」(3)となったという境遇である。

ごんが「うなぎのつぐない」として行ったのは「いわし」の投入であった。これは兵十が「いわし屋にぶんなぐられ」という顛末になり、ごんをして「これはしまった」と思わせた。自分のせいで被害にあった兵十を「かわいそうに」というごんには、さほどのモラルは感じられない。しかしながら「びく」の「うなぎ」と同様、「かごの中」の「いわし」も、所有権者が存在することに思い至ったことであろう。草稿ではこれ以来「権狐は、もう悪戯をしなくなりました」と記されたのである。

4. 「心の交流」はなされたのか

ごんの「つぐない」の行為は続けられる。

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本、持っていきました(3)

但しこの「持ってきてやりました」という記述から、ごんと兵十とが、少なくともごんの中では依然対等であって、ごんの行為は「うなぎのつぐない」というほどには罪悪感を抱いていないことが推測される。つまりごんは兵十の主張する、「うなぎをぬす」んだという意識はない。ごんにとって「うなぎ」は他の「魚」と同じく人の手によって「びく」に入れられたものを<自然>に還元するつもりだったのであって、それが偶発的に首に巻き付いたためなのである。恐らくごんの罪意識は鈴木氏の指摘するように、兵十の母の死期を早めたためではなく、「死によって断たれた兵十の母親への愛⁹」への「つぐない」であった。

しかしながらこのようなごんの行為が兵十に通じることは、加助によって断たれてしまう。

ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。「おれがくりや松たけを持っていてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ」(5)

水谷昭夫はこの部分についての鈴木三重吉の加筆訂正に対し、「原作にみられるような嗜虐的な感傷主義はあとかたもない¹⁰」と一蹴した。しかしながら現代の子どもを癒すのは、こうしたごんの明るさが作品の悲劇的結末をより際立たせているからかもしれない。なぜならば<心の通い合い>が断たれた「その明るる日も」(6)、ごんは兵十に「くり」を届け続けるのである。そしてそれがごんの最後の日となるのである。

無論先述の通り、ごんの気持ちは兵十には通じていない。

「ようし。」／兵十は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、火薬をつめました。そして、足音をしのばせて近づいて、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。(6)

下線部からも、兵十のごんへの殺意は明らかである。ごんを救済しようとする、あるいは兵十のごんへの<心の通い合い>の可能性を見いだそうとするいかなる努力も虚しい。兵十がすべてを悟るのは、その後、「土間にくりが固めて置いてあるの」を目にした時である。

「おや」／と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。／「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」／ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。(6)

このように、ごんと兵十とが<心を通わせた>のは、ごんの死の目前であった。新指導書にも「死と引き替えに心の通い合いを確認する二人。ただし、ごんはただうなずくだけである」と記される。つまりはごんの兵十への働きかけは、命を代償としてのみ実現可能なものだったのである。これは図らずも「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」(2)というごんの述懐が現実化されたものと言うことが出来る。

雪のために反響がなく、どこかへ吸いこまれてゆくような、短くて鈍い、その銃声を聞きながら、甲斐は茫然とくびじろを眺めていた。／くびじろは悲しげになき、首を振りあげ、立とうとして四肢でもがいた。雪しぶきが飛び散って、ずるずると斜面を滑り、大角がなにかにひっかかって、頭部を上にして停ると、もういちど高く、なき声をあげ、そして動かなくなった。そのとき甲斐は「対等だって」という声を聞いた。くびじろの最後のなき声が、そう云ったかのように、感じられたのであった。

唐突ではあるが山本周五郎『樵ノ木は残った』の名高い一節を引用してみた。到底「対等」ではありえない人と動物との冷徹な関係を、これは物語っている。最後に「火なわじゅう」を持ち出す兵十の前に、「小ぎつね」のごんはあまりに無力である。

それでは、ごんと兵十との<心の交流>は、不可能だったのだろうか。そうではない。それは

「ごんぎつね」という物語の生成過程において証明されよう。鈴木啓子氏は次のように指摘する。

語り手が村の茂平というお爺さんから小さい頃に聞いたというこの話は、ごんを撃ち、ごんの死に立ち会い、ごんの思いを理解した兵十によって語られ、村人によって語り継がれてきた「ごん狐」という非業の英雄の伝説なのだと¹¹。

「非業の英雄の伝説」という指摘は留保したいが、この物語の最初の語り手であったであろう兵十を契機に、ごんは「中山」の共同体に加わることができたのである。ごんはおろか、兵十さえも、この世からいなくなった現代において、「ごんぎつね」がなお読者に広く受容されていることこそが、ごんが我々の共同体に加えられていることを証してもいる。＜共生＞を課題とする21世紀においても、我々は「ごんぎつね」から重要なメッセージを受け取ることができるのである。

注

- 1 車田寿「小学校3・4年文学教材 ごんぎつね」（日本文学教育連盟編『小学校国語科文学教材辞典』1972年10月 鳩の森書房）
- 2 岩沢文雄『文学と教育 その接点』（1978年6月 鳩の森書房）
- 3 西郷竹彦『教師のための文芸学入門』（1968年 明治図書）
- 4 鈴木啓子『『ごんぎつね』をどう読むか』（『日本文学』53－8 2004年）
- 5 中村とも子・弓良久美子・間宮史子『『異類婚姻譚』に登場する動物』（一）（二）（『子どもと昔話』（6）（7）2001年）
- 6 『古代研究 民俗学篇第一』（1929年4月大岡山書店）所収。本文は「青空文庫」（<http://www.aozora.gr.jp/>）から引用した。
- 7 4と同。
- 8 鈴木啓子『『ごんぎつね』の引き裂かれた在りよう——語りの転位を視座として——』（田中実／須貝千里編『文学の力×教材の力小学校編4年』2001年3月 教育出版株式会社）
- 9 4と同。
- 10 「新美南吉の世界」（『永遠なるものとの対話』1983年3月新教出版社）
- 11 8と同。